ふたり姉妹

豆ヒヨコ

　走り去るあずき色の電車が、芽衣の前髪を優しく巻き上げた。
「春のにおい」
　風にふくまれた柔らかい香りが、芽衣を嬉しい気持ちにさせる。桜はまだ咲いていないはずだ。ちょうど母の家で、大きな桜の樹をながめてきたところだった。固いつぼみばかりで、お花見はまだ先ねと話し合った。でも、春はすでに訪れているのだ。知らないうちに。
　続いて銀色の電車が、するりと芽衣の前にすべりこんだ。コートのポケットにある切符に手を触れながら、車両の中ほどに乗る。できるだけドアにちかい場所を選んで座り、小さな茶革のポシェットをひざに置き、ふうと息をついた。
「発車いたします〜、ドア閉まりま〜す、お足もとにお気をつけください〜」
　お決まりのアナウンスとともに、のんびり鈍行は走り出す。
　車内に人はまばらで、外の陽気を感じられる程度には明るい陽射しが差し込んでいた。すぐ近くに人がいないのを確認してから、芽衣はスマートフォンを取り出してSNSを立ち上げた。友達たちのたわいないおしゃべりに、チェックを入れたり言葉少なにコメントを返したり、小さく笑ったりしながら暇をつぶす。つながっているのは短大時代の知り合いばかりで、そのほとんどはOLとして社会に出ていた。会社の愚痴が大半を占め、無職である芽衣はその朗らかさに、軽いうしろめたさを感じてしまう。
　ビルとマンションが混在するベッドタウンを、電車は縫うようにして走っていく。
「きっぷ拝見いたします、失礼いたします」
　車両間を隔てるスライドドアが開き、濃紺色の制服を着た車掌が、ちょこんと頭を下げて巡回をはじめた。乗客たちはいっせいにポケットやバッグをまさぐった。芽衣もいったんスマートフォンをしまい、ポケットから切符を取り出す。
「失礼いたします、はい大丈夫ですね」
「失礼いたします、ああどうぞどうぞ、ごゆっくり探してください」
　白いハンカチで額を拭きながら、車掌は右へ左へ歩き回り、ニコニコとスタンプを押していった。人懐っこい性格らしく、ひとりひとりに時間をかけてコミュニケーションをとった。うざったそうに返事もしない若者にも、笑顔を絶やさず何かしら話しかけている。きっと彼のポリシーなのだろう。いまどき珍しいわねと、向かいに座った主婦の二人連れがつぶやきあった。近頃は挨拶もおっくうになりがちだものね。
　乗っている人数が少なかったせいか、彼は思いのほか早く芽衣の席にたどりついた。
「はい、ありがとうございます。おからだ気をつけてね」
　にっこり笑いながら、くすんだ赤い印をきっぷにつけてくれた。なぜわかったのだろうとちょっと驚くと、初老の車掌はポシェットにつけたアクセサリーを指さした。お母さんに抱かれる赤ちゃんをデフォルメして描いたイラスト。照れるような気持ちで微笑み、ありがとうございますと言葉を返す。車掌はうなずくようにまた笑い、隣の老婦人に移ってきっぷを受け取った。
　ふと見ると、さきほどの主婦たちがじっとこちらを見ていた。目が合うと、二人して深くうなずいてくれた。何故か嬉しそうに。薄い笑いを浮かべながら、ふくらみはじめたお腹をそっと撫でる。さわり心地のよいワンピースの生地ごしに、蹴り返してこないかしらと淡く期待しながら。

　さっき桜をながめているとき、母はふいに涙を流した。まだ花のない、けれど隆々と張り出した枝を見上げて、突然目元をおさえた。
　芽衣は胸をしめつけられた。絞り出すように謝った。
「お母さん、ほんとうにごめんなさい」
　母はくすっと笑う。違うわ、あなたのことで悲しんでるわけじゃないのよ。
「ただ、お父さんがそばにいたらいいのにな、と思っただけ」
　スラックスのポケットから小花柄のハンカチを取り出して、母は崩れたアイラインの際を押さえた。ブラシを通しただけのショートヘアにたくさんの白髪が混じっていて、意味もなく芽衣は悲しくなる。
「もう謝らないのよ」
　空は青くさえわたり、春めいていながらも気温は低かった。母はサンダルの音を小さく響かせながら、顔を洗いに家に戻っていった。芽衣はどうしてよいかわからず、視線を落として土をそっと蹴った。
　20歳になって3週間が経ったころ、妊娠に気づいた。判定スティックのくっきりしたラインを見ても、不思議とマイナスの感情はわかなかった。ただ、やっぱり、と思った。わたしならやりかねない。お姉ちゃんなら絶対にないことだけれど、わたしならあり得る。生まれついてのぼんやり屋なんだもの。

　はじめに打ち明けたのは、やっぱり玲だった。先月のことだ。
「赤ちゃんがお腹にいるの」
　華奢なティーカップのふちを指でなぞりながら、芽衣は思いきって言った。目を合わせるべきだとは思ったが、できなかった。緊張して頬が赤く染まった。テーブルの上で、空いた左手を固く握りしめる。
「うみたいの」
　ちょっと顔が見たくて、と何気ないふうを装いながら、芽生は玲の仕事がない午後に郊外のマンションを訪ねた。まったく味のわからないお茶を言葉すくなに飲み、様子がへんよ？　と心配されたのをしおに告白した。きっちり拭き清められたダイニングテーブルは、深い色合いのマホガニー素材。落とした視線の先には、瀟洒にうずを巻いたテーブルの脚が見えた。こういう粋な家具ってどこで買うのだろうとぼんやり考える。わからない。これから一人暮らしを　一正確には二人だけれど一　まっさらな状態からはじめるというのに、家具ってものをどこで揃えるのが適当か、芽生には皆目わからないのだった。
「…私もなのよ。妊娠4か月」
　芽衣は飛び上がるように顔をあげた。栗色に染めたボブヘアーのサイドをそっと耳にかけながら、玲は不思議な微笑を浮かべていた。困ったような、沈んだような、喜びとは少し離れた静かな笑み。玲はきれいな手つきでティーポットのふたを開け、ちらと中身を確認してから立ち上がった。キッチンカウンターの向こうへ歩いて回り、磨きこまれた銅の薬缶に水を注ぐべく、さっと水栓レバーを押し上げる。
「芽衣は？」
「え、何が？」
「赤ちゃんの月齢」
　月齢。こどもがおなかに宿ってからの期間。芽衣は無意識に腹部へ手のひらを添えた。
「ええと、来週で3か月になる、かな」
　何も言わず玲はにっこりした。他にどうしていいかわからなくて、芽衣はぽかんとしたままお祝いを言った。
「おめでとう、お姉ちゃん」
　あなたもね、と目元だけほころばせて玲は応じた。清冽な水流と、それが薬缶の底を打つドラムのような音。何かそぐわないなと思ったけれど、取り消すのもおかしいので芽衣は口をつぐむ。沈黙が重くて、出されていたフィナンシェを頬張った。レモンとバターの香りがひとときの安らぎを運んでくれる。
「お母さんには言ったの？」
　ティーカップに新たな紅茶をそそいでくれながら、玲はのぞきこむように聞いた。
　ふたたび芽衣は視線を落とした。最後のひとくちだったフィナンシェのかけらが、甘くのどを通り過ぎた。ぐっと涙の圧力がまぶたを襲ってきて、こらえようと思ったが遅かった。ジーンズに点々と染みが広がり、ひとつひとつ言葉を選びながら、芽衣はなんとか答える。
「たぶん、父親…の人とは、別れることになると思うから」

　事情を説明しようとしても、上手くいかなかった。ただひたすら、うみたいの、それが正しい気がするの、とつぶやくしかできなかった。母に申し訳ないと思っていること、一人でやっていく覚悟はあること、でもその方法はこれから学んでいかなければならないこと。喉元までたくさんの言葉がこみ上げているのに、うまく口を動かすことができなかった。どうして何もかも上手にやれないのだろうと芽衣は思う。極力まっすぐに進んでいるのに、気がつけば蛇行してしまっている。自転車をふざけて乗り回す小学生のように、のろのろくねくねとしか走れない。

「泣かないで」

　ひんやり落ち着いた声で玲はつぶやき、手を伸ばして芽衣の頭をさらりと撫でた。芽衣は頬を手の甲でぐいっと拭う。やっと目を上げると、玲は新たにお菓子の小袋を破っているところだった。

　中身を確かめて、玲はぐっと眉をよせた。

「やだ、抹茶入ってた」

　取り出すと、鮮やかなグリーンの生地が練りこまれたサブレだった。小袋に描かれたイラストのせいで気がつかなかったらしい。しばらく見つめたのち、芽衣にサブレを差し出す。

「食べてよ」

「え」

　泣いていたことも忘れ、芽衣は玲の指に挟まれた焼き菓子を凝視した。

「…あたしも抹茶は好きじゃな」

「食べてよ」

　こういうとき玲は絶対にゆずらない。じゃあ残せばというとそれも許さない。 覚悟を決めて、今にも崩れそうに割れたそれを受け取った。口に入れると苦みが舌に染みて、バターたっぷりのクッキー部分と奇妙なハーモニーをつくる。ティーカップを無造作につかんで紅茶を干し、何とか飲み下した。

　玲はというと、更に小袋を開け、

「やった当たり。いちごジャム入りだわあ」

などと、と喜びながら満足げに頬ばっていた。芽衣の涙など、見てもいないわと言うように。

　相手は大学4年生で、それなりに善処しようとしてくれた。　頭がよくて優しくて羽振りもよくて、友達にうらやましがられるような彼氏だった。産婦人科につきそい、彼自身の両親に告げ、ともに長い会合を持った。 彼の父親は、芽衣の手をしっかり握り「我が家に嫁いでくれるね」と微笑んだ。母親はハンカチを目元にあててやさしくうなずき、彼は「本当にごめん」と勢いよく頭を下げた。オレンジの光をこぼすシャンデリア、ビロードの重いカーテン、グラスをのせた木製のコースター。古くさくて懐かしい、ちょっと良い家庭の風景。ありがたい、と芽衣は素直に思った。

　しかしそのすべてが、全くといっていいほど芽衣の心に入ってこなかった。

　彼と過ごしているとき、芽衣には「空に向かってラケットを振っている」感覚が常にあった。何か、何かひとつ足りないのだ。隠された苛立ちと、空虚な真面目さだけがいつも強く感じられた。そして彼の家族は、それを倍増させ発酵させたような、不気味な雰囲気に包まれていた。ごく優しい態度と言葉は、芽衣の恐れに拍車をかけるばかりだった。

　だから結局、すべてを投げ出して逃げたのだった。

「このへんに住むといいわ」

　ありがとうの一言もなく、玲は唐突に言った。指についたジャムを上品になめる。

「産婦人科はあるし、手ごろな賃貸アパートがあるようだし、屋島にも近いし」

　屋島というのは母親の住む実家のことだ。
「保育園だっていくつか見かけたことあるし。何とでもなるわよ。もう短大は卒業したんでしょ？フリーターでよかったわね」
　フリーターじゃない、就職が決まらなかっただけだよと言いかけて止める。
「何よ、いやなの？」
「…いやじゃないけど、お母さんが」
　芽衣は母を思い浮かべた。屋島の古い一軒家で、クロスステッチばかりしている丸まった姿を。悲しむだろうか蔑むだろうか、弱弱しく笑うだろうか。今回はあきらめなさいと母に言われたら、もうどうしていいかわからなくなる気がして怖かった。再び両手に力が入る。
「大丈夫よ。私からも言っておくし」
　指についたクッキーのかけらをパラパラと払い落としながら、玲はなんなく言った。
「産むって決めてるんでしょう？　何とでもなるわ」

　銀色の電車は、中心街からひとつ離れた郊外の駅に止まった。足元に気をつけながらホームに降り、西口から出てニュータウン方面へ向かう。古いセメントづくりの駅を出るといきなりショッピングセンターで、芽衣は特売品のティッシュ箱が積まれたワゴン横を通り過ぎ、入口の自動ドアをくぐった。ベーカリーの前を通り食品売り場を（半額品をのぞきながら）抜けて、自転車のたくさん停められた裏口から出れば自宅に一番近いルートとなる。
　古い住宅がぎっしり並ぶ細い道を、さらに10分ほど歩いた。こぼれんばかりに花をつけたこぶしの木を見つけ、スマートフォンを取り出して写真を撮った。歩きながらしばらく考えて、『春なう』とコメントを添えSNSにアップロードする。春なう。なんのひねりもないけれど、今の芽衣の率直な気持ちだった。ふわふわと落ち着かず不安で、でもすこし喜ばしい。
　母への告白は、おおむね　ーふいに見せた涙以外はー　スムーズだった。ただ、
「お父さんのお金、とってあるわよね？」
と聞かれた。
「ある。もちろん」
　あんなの手をつけられるわけがない。いわくつきなのだから。けれど、もう今後は使うしか仕方ないだろうと思っていた。背に腹は代えられない。
「良かったわ。なら、好きにしなさい」
　しっかりと目をすえて、母は言った。急に孫が2人もできてびっくりだわよ、とも。大げさに肩をたたいてみせて笑った。クロスステッチで描かれたカントリー風の少女が、小さな額のなかから一緒に微笑んだ。大丈夫よ、問題ないわとでもいうように。
　お姉ちゃんはお母さんに何を話しておいてくれたのだろう、と芽衣は思いをめぐらせる。玲と母親との間には、芽衣には測り知れない連帯があった。それは芽衣が生まれてすぐ決まった両親の離婚にまつわるものに違いなく、物心ついたときには（つまり玲が中学生の頃には）すでに母親と玲は対等の立場だった。
　家族に守られ甘やかされる存在であることは、こどもをうむと決まった現在でさえすこしも変わっていない。むしろ度は増していた。そのことに、芽衣はかすかな空恐ろしさを感じた。こんなにも育っていない自分が、赤ちゃんを育てていくなんて大きな間違いであるような気がした。けれど電車はもう走り出してしまった。もはや止めることはできなかった。

　コーポ笠原という看板が出されたアパートの2階角部屋が、芽衣とこどもの新居だった。古びた、でも日当たりの良い２DK。ゆっくりと踏みしめるようにして（そろそろ体のバランスがとりづらくなってきたのだ）外階段を昇り、ドアの鍵を開けようとしてノブにかけられた紙袋に気づいた。エルメスのショップバッグで、中をのぞくと涼しげに包装された水ようかんの箱が入っていた。
　エルメスに水ようかん！　芽衣は思わずニマリとする。
『あなたの好物見つけたから、あげる。今夜は引っ越しそばを食べにおいで　玲』

レースペーパーのような便せんに、それだけが青いインクでつづられていた。芽衣のためを装ってはいるが、恐らく玲本人が食べたくなっただけだろう。第一、引っ越しそばって私がふるまうものじゃないのかしら。玲ってどこかずれている、と芽衣はクスクス笑う。その面白さは、妹に対してしか発揮されないものなのだろうけれど。

靴を脱ぎ、ペンダントを外しながら、持参する副菜はなにがいいかなと考えた。ナスの煮びたし、厚揚げのおろし和え、青菜のごま和え。きゃぺつとあさりをさっと蒸したものも、この間試して美味しかった。そうだ、借りていた文庫本を忘れずに返さなければ…今のうちにバッグに入れておこう。今日は孝之さんは帰ってくるのかな？母から預かったイタリア土産も持っていかないと。

鼻歌など歌いながら、洗面所で手を洗う。気づいたら不安は棚上げしてしまっていた。今夜の楽しい夕食で頭がいっぱいになり、芽衣は本当に忘れていた。

母と姉に打ち明けて、さっぱり肩の荷が下りたせいもある。しかしそれだけではなく、悩みつづける根気がない―そんな能天気さが芽衣にはあった。そうした甘えや楽天主義や考えの浅さが、ときに自分を窮地に追い込むことは知っていた。けれど所詮、そのようにしかやれないのだ。屋島の家ですくすくと育まれてきたもの。

時計は午後四時半を指している。残り野菜の天ぷらを作っていくことに芽衣は決めた。揚げてすぐに持っていけばほとんど冷めない距離に、玲が住む高層マンションは建っている。